



## 「自分の花が人の目に触れる」という喜びや高揚感

さいとう なおと 齊藤 由翔 (最上町法田下) 東北農林専門職大学2年



初めて公共の場に個人で花を飾ったのは、小学5年生のときに大堀小学校に飾ったことでした。ステージの花、玄関の迎え花、校長室の花など、多くの場所に生けさせていただきました。緊張もありましたが、それ以上に「自分の花が人の目に触れる」という喜びや高揚感が大きく、貴重な経験となりました。中学生になってから先生方のご協力をいただき、入学式、卒業式などの行事で展示を

「生け花との出会い」  
私は生け花を始める前から花が好きで、自宅や保育所で花瓶に挿して飾ることを楽しんでいました。小学1年生の時に「いけばなこども教室」の募集をきっかけに、生け花を本格的に習い始めました。習い始めてからは、花型に合わせて一本一本の個性を見て考えるようになり、花と向き合う時間がますます楽しくなりました。今でもよく覚えています。

続けることができました。高校生になると最上郵便局で挿花する機会をいただき、約2年間展示を行いました。生け込みの際には局員の方や利用者の方から温かい声を掛けていただき、活動の励みになりました。また、地域の方から花材を提供していただくこともあり、そのお気持ちがとても嬉しく、支えられていることを実感しました。振り返ると、展示活動は決して自分ひとりの力では続けられず、多くの方々の協力があったからこそ成り立っていたのだと思います。

「生け花を通して学ぶこと」  
生け花を通して、花の表情の見方や美しく見える挿し方といった技術だけでなく、植生や特性などの知識も身につきました。生け込みの際の何気ない会話から新しい発見が生まれることも多く、学びの幅が広がりました。現在は東北農林専門職大学で学んでいます。生け花で培った観察力や植物への理解が、授業や実習の中で生きていけると感じています。まだ分からないことの方が多く、学ぶ事そのものが楽しいと実感しています。

「今、考える将来の夢」  
まずは今年度から始まる臨地

「自分の暮らす地域、町について思うこと」  
地域の方々はとても温かく、活動を後押ししてくださる声掛けや花材・花器の提供など、多くの支えをいただいています。また、最上町歴史かるたの制作に携わった際には、町の歴史や文化、自然について学び、ふるさとへの愛着が深まりました。

一方で、最上町の人口は年々減少し、商店街の店も少なくなってきました。さみしさを感じることもあります。これからも町役場の方々や有志の皆さんによる魅力発信が続く、最上町がさらに盛り上がることを願いつつ、私も何か貢献できることがないか考えていきたいと思っています。今回、このような寄稿の機会をいただき、心より感謝申し上げます。



## 村山市で「池田敏美さんを偲ぶ会」

2024年8月23日に亡くなってから1年半、3月6日、生前10年に渡ってコンサートを行ってきた村山市の「アクトザールM」(映画監督の村川透氏のホール)でヴァイオリニスト池田敏美さんの追悼コンサートが行われました。生前池田さんと演奏活動を行ってきたピアニストの郷津由紀子さん、チェリストの鈴木皓平さん夫妻、ヴァイオリンは池田さんのお孫さん池田湖珀さんが東京から参加しました。池田さんが愛した12曲を演奏しました。

最上町から伊藤勝副町長夫妻、コーラス絆の佐々木修一さん、まちプラの大石紳一郎さん、やまなみの大場理事長夫妻が参加交流し、生前の池田敏美さんを偲びました。



## NPO法人やまなみの事務所、移転先を探しています！

法人設立以来、町内外の多くの人々が気軽に立ち寄り、歓談、活動した事務所の建物が老朽化して来年3月末までに町に返すことになりました。引き続き町民の皆さまが集える場、やまなみの実務が出来る場を探しています。向町地区を希望しています。5坪程度で安い家賃で貸して下さる家主さんヤーイ!!



## 常勤の介護職員募集！

1か月の賃金 222,000円 (高卒初任給 202,000円)  
介護経験のある方は経験年数換算表で優遇  
夜勤手当 1回 5,000円  
賞与 年2回  
●社会保険完備 ●通勤費は実費支給  
●使用者全額負担の退職金制度に加入

## シリーズ 「人口減少時代を生きる」 ⑥

日本の人口が急速に減っている。どうしてか、低出生の年が続いているからだ。なぜだろう。いろいろあるが、この半世紀、高学歴化や女性の社会進出、産業構造のホワイトカラー化、子育てコストの上昇などが連鎖し、家族を持つ負担が増して、晩婚化、晩産化が進み、やがて結婚しない人、結婚しても多くの子どもを持たない人が増え、現在に至っているのだという。この傾向は日本だけでなく隣の韓国、中国でも人口減少に直面している。日本の特徴は減少のペースが速すぎるのだ。

私たちが住む最上町の過去20年の出生数を見てみよう。(左表)直近の5年は20人台と深刻になっていく。まもなく小学校6学年で60人、中学校3学年で30人台になるのだ。

「急激な減少をどう食い止めるか」  
人口減少のペースが速いとどんなことが起こるのか。まず労働力と消費が急激に減少し、経済に大きな負担が及ぶ。日本は少子高齢化によって

最上町の過去20年間の年度別出生数

年度	男	女	計
2024 令和6年	6	10	16
2023 令和5年	15	5	20
2022 令和4年	11	11	22
2021 令和3年	14	13	27
2020 令和2年	15	14	29
2019 令和元年	18	24	42
2018 平成30年	18	25	44
2017 平成29年	30	21	51
2016 平成28年	22	23	45
2015 平成27年	12	26	38
2014 平成26年	35	31	66
2013 平成25年	25	29	54
2012 平成24年	26	33	59
2011 平成23年	35	37	72
2010 平成22年	28	23	51
2009 平成21年	51	29	80
2008 平成20年	34	29	63
2007 平成19年	39	29	68
2006 平成18年	42	32	74
2005 平成17年	40	41	81

## 子どもが生まれない

生産年齢人口(15〜64歳)が現在より2割減る。3人に1人が高齢者になり、あらゆる分野の支え手が不足し深刻になるという。

どうすればいいのか、人口学者金子隆一さん(明治大学教授)の提言をそのまま掲載します。「将来の労働力確保のため、成長維持のためという経済優先、組織優先の考え自体が少子化を進めてきたことに気づかないといけません。社会や地域での人生を残念なものと感じている人は、子供を持つ意欲が低いでしょう。出生率は人々の社会への支持を反映しているとも言える。つまり、人々に支持される社会を作ることが遠回りに見えても少子化解消の最短ルートなのだと思います。」(朝日新聞2024.7.3付)

## 祖先の心を伝える碑 (三十六)

**月楯の巳待供養碑**  
 菅進家は、代々の戸主法印が月楯弁天を守ってきた羽黒派修験の南泉院の、子孫である。小

町内の巳待供養碑は、かつて当地で二支の巳の日に日待が行なわれていたことを伝えている。日待の日や回数は不明だが、月楯と向町では講が結成されて巳の日に講員が集まり、仲間内の取り決めや願い事などをしたのだろう。ではどこに願い事を託し、なぜ巳の日に講員が集まったのか。願い事を託した先はお使いが蛇の月楯弁天(厳島神社)で、巳の日に集まったのは十二支の巳が動物では弁天様のお使いという蛇を表わすとされてきたから。月楯と向町の巳待供養碑は、月楯弁天の信仰に関係する碑なのである。

者の国が勝手に負担と給付をどどん変えていく。たとえば民間保険会社がルールを途中で変えたら悪質で保険詐欺になるの。介護費用の負担増とサービス利用制限をどうしたら解決できるのでしょうか。国庫負担の割合を増やすしかないと思います。国民が払う保険料50%、税(国22.5%、県12.25%、市町村12.25%)、国庫負担22.5%の割合を増やせの声を上げましょう。

国川を挟んで弁天堂の真向い、同院敷地内に立っていたという、二基の巳待供養碑の場所は昔も今も変わらないのではないだろうか。今も二基の自然石に彫られた「巳待供養」の文字が肉眼ではつきり確認できる。写真左の碑は地上高約一六六cm、最大幅約五五cm、奥行約四五cm。右の碑は地上高約一一五cm、最大幅約五九cm、奥行約三〇cmである。二基とも三三年前の筆者計測値より高さが低くなっている。少し土中に沈んだようである。左側の碑左側面に「寛延四歳」、右側面に「大権僧都法印有圓敬口」の刻字があり、左の供養碑は寛延四年(宝暦元年、一七五二)に南泉院第三十七世法印の宥圓が建立した碑と判明する。右側面口の下に「讀」とあるようなので、宥圓が歴代の法印への篤い供養の念を込めてこの碑を建立したのではないかと推察される。右側の碑には建立年の刻字はなく、「二」らしき刻字が見えるが、文字の断定はできない。当地の歴史上、月楯弁天は養蚕や商売繁盛、縁結びなどの守



月楯の巳待供養碑

り神として長く信仰されてきた。月楯の巳待供養碑は江戸中期、二七〇年以上前からの月楯弁天信仰を証する貴重な歴史資料の一つである。

### 向町の巳待供養碑

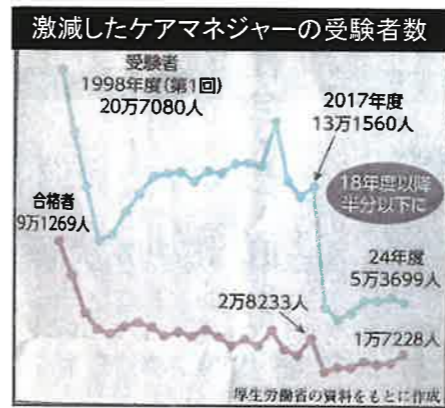
向町一區、絹出橋西側の五十嵐商店前にある巳待供養碑は高さ約一〇一cm、最大幅三六・五cm、奥行七cmの加工石の碑。上部に庇のある造りで、正面に「巳待供養塔」と彫られているが、昭和十七年の向町大火で三つに折れたのを後に接着し、再建立した碑である。風化で建立年や建立者は確認できないし、創建地が現在地なのかどうかも定かでないが、江戸時代、向町は新庄領内で出店して商売をしてもいいと新庄藩が許可した七町の一つ。向町は当時から小国郷(現最上町)の商業の中心地であり、新庄領内では数少ない町場と見なされていたのである。史料による確認はできないが、向町の商人たちは巳待講を組織し、商売の神様、金神様として月楯弁天を篤く信仰していたのだろう。この「巳待供養塔」は、一度は向町大火で折れてしまった巳待供養碑だが、心ある先人達の尽力のお陰で、向町の歴史の一端を証する物証として伝わってきた稀少な歴史資料と言える。

向町の巳待供養塔(碑)



## 制度できて26年、崖っぷちに立つ介護保険

### ケアマネ不足でわかったこと



2000年4月にスタートした介護保険制度、26年が過ぎました。この間、保険の負担増とサービス切り下げの繰り返しでした。一律1割だった利用者負担は所得に応じて2割、3割に。自己負担率が1割から2割になるといふことは、利用者からすれば倍になるといふことです。又事業者を支払われる介護報酬は抑制され、事業者は経営難にあえいでいます。制度を持続させるためというのが国の言い分で、介護費用の増加を負担増とサービス利用制限で調整しようとしています。保険制度をよく考えてみると、どんな保険でも決められた給付で被保険者が保険料を払うのがルールです。ところが介護保険は26年間、保険

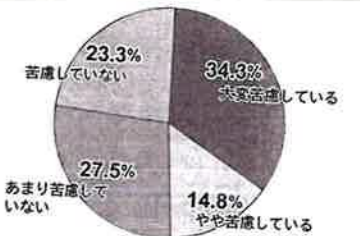
### ケアマネ不足深刻

介護費用の負担増とサービス利用制限をどうしたら解決できるのでしょうか。国庫負担の割合を増やすしかないと思います。国民が払う保険料50%、税(国22.5%、県12.25%、市町村12.25%)、国庫負担22.5%の割合を増やせの声を上げましょう。グループホームやまなみでは開設以来15年勤めた管理者兼ケアマネジャーが高齢になり退職し、昨秋、町内の介護事業所を定年退職した方を新しく迎えました。ケアマネ資格が切れていたので盛岡市で再研修を受け資格を回復し、この半年間ホームの牽引車となり頑張っていました。4月末現在回復していません。グループホームの運営基準ではケアマネ配置が必須で、今、理事会、職員一丸となって探しています。

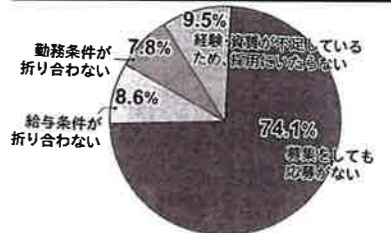
### ケアマネのなり手がいない、グラフからも鮮明

左上図のグラフを見て下さい。ケアマネ受験者が極端に減っています。右下図は日本グループホーム協会の採用状況のグラフです。苦慮が34.3%、日本のグループホームの実に3施設に1施設がケアマネ確保で苦慮しているのです。やまなみでもケアマネ確保に苦慮している状況が全国の調査でわかります。ケアマネさんはシャドーワークと呼ばれる無報酬労働、低賃金、過密労働でなり手がいません。国に負担を押し付けられないで、担

### ケアマネの採用状況



### 苦慮している理由【「大変苦慮している」「やや苦慮している」と回答した事業所】



### ケアマネジャー(常勤又は非常勤)募集!

要介護者や要支援者が心身の状況に合わせて適切な介護サービスを受けられるように計画書(ケアプラン)を作成し、市町村や介護事業所などとの連絡、調整にあたります。グループホームでは計画作成担当者として勤務します。

＜常勤の管理者兼ケアマネ＞		＜非常勤の計画作成担当者＞	
勤務	月約22日勤務(1日7時間45分)	勤務	週2日程度勤務(1日6H~7.75H)
給与	基本給 291,000円	給与	1H 1,600円
	管理者手当 10,000円		処遇改善手当 月8,000円
	資格手当 5,000円		通勤費 全額支給
	通勤費 全額支給		賞与 年2回
	賞与 年2回		
社保完備(使用者全額負担の退職金制度に加入)			

## 月楯弁天信仰に関係する碑

### 巳待供養碑

伊藤 和美(最上町若宮在住)